

〔費孝通先生追想特集〕

## 費孝通氏の民族理論

Fei Xiaotong's Contribution to Ethnic Theory

周 星

ZHOU Xing

愛知大学国際コミュニケーション学部教授

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: zhouxing@vega.aichi-u.ac.jp*

### Abstract

The essay briefly surveys Dr. Fei Xiaotong's studies in Ethnology and Anthropology for more than 70 years and particularly reviews his systemic theory of "Plurality and Unity in the Configuration of the Chinese People" which is applicable to interpret the historical progress of ethnic groups in Chinese society. When locating the theory in Chinese Ethnology context, the author also analyzes its influence, development and challenges.

費孝通は中国の代表的な社会学者であり、人類学者である。費孝通は一生を中国の社会科学事業にささげ、その多くの研究業績は貴重な学術的財産として、中国社会科学の権威となっている。人類学者として費孝通は中国国内の少数民族と中国多民族関係などの問題の研究を非常に重視した。費孝通は長年自ら少数民族地区に入りこんで行った研究の積み重ねと、中国の学者の知恵の集合をもとに、有名な「中華民族の多元一体構造」理論を提出した。これは中国の民族政策に大きな影響を与えただけでなく、国内外の学界でも広く関心と討論を引き起こした。本稿は費孝通の民族研究の経歴を述べ、それをもとに、費孝通の民族理論形成の軌跡、内容の要点および主な貢献と残された問題について分析、紹介する。

## 費孝通の民族研究の軌跡

費孝通の学問的生涯を通観すると中国の少数民族同胞に対する深い同情や思いやりに貫かれている。また、少数民族社会と文化、民族関係と中国式の民族理論に対する飽くことのない研究と、探索にも貫かれている。

費孝通の初期の学術活動は民族研究と不可分の状態で始まった。1933年、費孝通は精華大学大学院に入学、ロシア人類学者のシロコゴロフに師事した。シロコゴロフは中国東北のマン＝ツングース諸民族の社会組織と文化を専門に研究していたが、費孝通には形質人類学、言語学、民族学などの指導をした。1935年費孝通はシロコゴロフの勧めで、初めてのフィールドワークを広西省大瑶山地区の“特殊民族（ヤオ族）”を研究対象として行なった。この時のフィールドワークでは、不幸にも事故が発生し、費孝通は負傷、新婚の妻は死亡したが、彼はその後亡くなった妻の名で、当時としては非常に質の高い民族誌を出版している。まさに彼自身が「花藍瑶社会組織」の「後書き」に記しているように、費孝通はこの調査によって中国文化の“複雑性”について深く認識するようになったのだ。1938年、費孝通は英国留学から帰り、雲南大学や西南聯合大学などで教える一方、江村調査以来の農村研究を続けていた。同時に辺境の少数民族地区の社会文化に対する理解も深めていった。1939年費孝通は昆明の「益世報」に文章を掲載し、中華民族の“一”と“多”の構造関係についての討論に参加した。これはずっと後になって提出した「多元一体論」の重要な伏線だったと思われる。

1950年から1952年まで、費孝通は新政府の中央訪問団に加わり、副団長として、広西、貴州などの貧しい少数民族地区を訪れて、民族団結と民族平等の政策を宣伝し、少数民族の文化、言語、歴史、現状などを理解した。1952年、費孝通は中央民族学院に移り、中南民族研究室主任、中央民族学院副院長などを歴任した。1953年、費孝通は中央民族学院において民族歴史概論などの科目を担当し、民族の角度から改めて中国の歴史を述べてみようとしてみた。1953年から、費孝通は当時の多くの民族学者、歴史学者、言語学者などとともに歴史的に重要な「民族識別」工作に積極的に参加した。1955年前後、費孝通は主に貴州省の民族識別に関係のある調査と研究に参加した。その後、1980年代初期に民族識別工作は次第に終了していくが、事実上これは中国民族学が、国外の民族学、文化人類学に比して、より強烈な“民族体”意識を持つに至らしめた。それはその後のかなり長い期間、中国民族学の重要な特徴ともなり、限界の一つともなった<sup>1)</sup>。1956年から1957年にかけて、費孝通は全国人民大会によって組織、実施された少数民族社会歴史大調査に

1) 周星 1990年 第三期「応用的民俗学と人類学及其在中国的実践（応用民俗学と人類学及びその中国における実践）」『社会科学戦線』。王建民 1998年「中国民族学史（下巻）」雲南教育出版社 pp. 126-127。

参加し、指導的な作用を発揮した。この期間費孝通は、貴州、雲南などに何度も赴き、フィールドワークを深める一方、民族問題の各種の理論的問題にも積極的に思考を加えていった。

周知のように、1950年代の民族歴史大調査とその成果は中国民族学と民族関係史の研究の最も重要な資料の基礎となり学術実践のよりどころとなった。1956年8月費孝通は林耀華と共同で「中国民族学の当面の任務」<sup>2)</sup>という一文を発表し、少数民族の族別問題、少数民族の社会の性質、少数民族の文化と生活、少数民族の宗教信仰という四つの面について中国民族学の基本課題を討論し、広い範囲で共鳴を引き起こした。この文章は“民族”概念に対する分析を通して、中国民族学者がすでに外来民族理論を簡単に当てはめることを拒絶する傾向にあることや、当時の学界がすでに中国多民族社会の複雑性と各民族間の境界の曖昧性を認識していたことを反映している。

1957年費孝通は不幸にも右派に判ぜられ、1978年に名誉回復されるまで、20年以上学術研究に関する仕事に携わることができなかった。1978年に学術活動を再開してから、中国社会科学院民族研究所の副所長を担当し、また長期間にわたって中断されていた民族理論研究に改めて取り組んだ。1979年、費孝通は中国社会学の再建を命ぜられ、同年中国社会学会会長に選ばれた。1980年費孝通は中国社会科学院社会学研究所の組織に加わり、その第一代所長となった。費孝通は中国では社会学と社会人類学(民族学)の区別はさほどはっきりする必要がないという考えに傾いていた<sup>3)</sup>。彼によると、彼が行なっている民族研究はすなわち、国内の少数民族で行なう社会学研究であった。

1978年、費孝通は“我国の民族識別問題について”<sup>4)</sup>を発表し、中国民族政策の根本基礎である、“民族識別”に対し、学問的立場から、全面的なまとめをした。その中で、中国多民族社会の特徴に言及し、個別の民族の問題を孤立的に考えてはいけないと指摘した、視野を広げ、例えば、青海チベット高原の縁にある漢民族、チベット族、イ族の民族回廊とその複雑な民族交流史や、さまざまな理由により融して合さずあるいは化さずに他の言語にはさみこまれる形で形成した言語の“孤島”現象などは、広い学術的視野のもとに討論されるべきであるとした。同年11月、費孝通は京都で開いた国際シンポジウムで発言し、中国の各民族はそれぞれの特色を持つ社会組織や文化を創造発展させてきただけでなく、互いの交流、融合、分化、相互依存と相互促進等を通じ、共同で、各民族を含む総体としての“中華民族”を作り上げたと明確に言及した<sup>5)</sup>。この兄弟民族が結合して作

2) 費孝通、林耀華 1988年「中国民俗学当前的任務(中国民族学の当面の任務)」『費孝通民族研究文集』民族出版社。

3) 費孝通 1982年「学歴自述」費孝通『雑写甲集』天津人民出版社。

4) 費孝通 1980年第一期「關於我国民族的識別問題(我国の民族識別問題について)」『中国社会科学』。

5) 費孝通 1988年「对中国少数民族社会改革的一些体会(中国少数民族社会改革に対する若干の体得)」『費孝通民族研究文集』民族出版社。

られた総体を理解するには、“内外の相対性”つまり、少数民族の文化的個性、すなわち総体に相対する局所性と特殊性を明確にしなくてはならない。費孝通は1950年以後における中国の少数民族社会改革の成功はまさに総体の中の特殊性が十分に尊重され、そうしたからこそ内在の要素の作用が発揮できたからだと考えている。費孝通は多元性と特殊性が十分に尊重されるべきであるのと同時に、総体共同の利益というものも確かに存在すると主張している。

1980年、費孝通はアメリカで応用人類学会の“マリノフスキー賞”を授与され、その授賞式では「人民の人類学に向かって」と題する有名な講演を行なった<sup>6)</sup>。この中で民族識別と少数民族社会改革の中国民族学研究について触れたとき、国の政策に協力はしているが、これはすでに政治には属さず、政治に取って代わることもできない。むしろ切実な調査研究からの発言であると強調した。費孝通は、調査者と被調査者の関係を根本から変えなければならないと述べている。中国では民族平等と少数民族の発展を助けるのは調査者だけの目的ではなく、被調査者にも求められることであるとした。費孝通のこうした学術研究の応用価値を重視する見解は、彼の“志在富民”という人生の志向と関係があるし、また中国のインテリの憂患意識や中国の学問の実学的伝統も関係がある。

費孝通は、民族識別と民族政策など様々な要素の影響により、中国民族学研究に存在する強烈な“民族体”意識が生み出す研究方式の問題について早くから気づいていた。1981年12月、費孝通は中央民族学院研究所の座談会で、民族研究方法の転換について明確に示した。すなわち、少数民族を“民族別”に分けて一つ一つ研究するのは方法上長所もあるが、限界もある。そのため、今後は視野を広げるべきで、例えば、漢チベット回廊、雲貴高原、南嶺山脈回廊などのいわゆる“区域研究”に力を入れるべきであるとした。費孝通はこれらの区域の複雑な多民族の関係をしっかり研究してこそ、中華民族の構造を明らかにすることができ、この土地の上の変化から各民族の過去や現在がわかると考えた<sup>7)</sup>。このために費孝通は当時西南民族学会が力を入れて推し進めていた六江流域民族の総合調査を大いに支持した。費孝通は普段から民族別研究を超えることの重要性を特に強調していた。費孝通は中国の諸民族の特徴はすなわち互いに混ざり合っている点にあり、個別にある民族の歴史を取り扱ってもその特徴は容易に見出しえないと指摘した<sup>8)</sup>。1982年、費孝通は再び中華民族という全体の中から各民族間の往来の変化を見るべきだということ

6) 費孝通 1981年「邁向人民の人類学（人民の人類学に向かって）」費孝通『民族与社会（民族と社会）』人民出版社。

7) 費孝通 1983年「民族社会学嘗試（民族社会学調査の試み）」費孝通『從事社会学五十年』天津人民出版社。

8) 費孝通 1982年「支持六江流域民族的綜合調査（六江流域民族的綜合調査を支持する）」『民族学報』総第二期。

提出した。それと同時に、費孝通は中国多民族関係の構造における民族融合の程度の違いや、混ざりはしてもひとつにはならない多くの現象に、より多くの注意を注ぐようになった。中国の民族学研究は個別の民族や省に限るべきではなく、また、ひとつの学問に限るべきでもない。むしろ広く全面的で全体的な観念と広い視野を持ち、考古学、言語学、歴史学、形質人類学、社会学などと連合し、総合的に研究して中華民族の形成についての問題を解決すべきであり、中華民族という大家族のそれぞれの成分が歴史上どのように動いたかを解釈し、その上でやっと各民族間の関係をはっきりさせることができるのだと論じた<sup>9)</sup>。1984年三月、国家民族委員会が招集した民族問題五種叢書<sup>10)</sup>の工作会議上、費孝通は講話で再び民族史研究の方法と視野の問題を取り上げた。少数民族は歴史上ずっと孤立していたものではなく、一つ一つの民族の歴史を区別して民族ごとの歴史を書くことは非常に困難であると述べた。中国は、多くの民族が混ざり合っているように、歴史も互いに分けることができない。もし無理に分けようとすれば混乱するばかりだろう。中国の多くの民族回廊では、様々な民族が行きかい、分かれたり合わさったりしており、歴史上の民族は互いに入れ替わったり、融合したり、併合しても同化はしない、などの現象が多く見られる。そのため民族を固定したものとは見てはならないというのである。学問の発展という点から見ると、後に費孝通の提出した“多元一体”理論は、ある程度において、まさに中国民族学が少数民族の民族別研究に偏っているという限界傾向に対する是正であった<sup>11)</sup>。

費孝通は長期にわたって民族学の実地調査と研究に携わってきたと同時に、少数民族地区の経済、社会、文化の発展の問題もずっと重視してきた。1979年のカナダでの講演では中国の現代化において、少数民族の発展は欠くことができないし、少数民族の発展を国の現代化の発展の枠外に置くこともできないと明確に述べた。彼は差のあることを認め、発展を通じて差を解消しなければならないが、少数民族の特徴は残さなくてはならないと主張した。1980年代中期以降、費孝通は少数民族文化の特徴と、少数民族地区の特徴から出発して、いかに少数民族の経済と社会文化事業を発展させるかという課題意識をますます強調した。1984年には沿岸地区の郷鎮企業と小都市問題の研究を推し進めると同時に“辺区開発”の研究課題を提出した。いわく「辺区開発研究は実は少数民族地区の社会経済の戦略研究である<sup>12)</sup>」。1985年、費孝通は北京大学社会学人類学研究所を設立する。

9) 費孝通 1982年第三期「談深入開展民族調查問題（民族調查問題のさらなる展開について）」『中南民族学院学報』。

10) 五種叢書とは『中国少数民族簡史叢書』『中国少数民族語言簡誌叢書』『中国少数民族自治地方概況叢書』『中国少数民族社会歴史調査叢刊』及び全面的な概要の一冊本『中国少数民族』を指す。

11) 陳連開 1995年第四期「中国民族研究的識異与求同」『社会科学戦線』。

12) 費孝通 1988年10月『費孝通民族研究文集』自序 民族出版社。

そして少数民族地区の経済、社会、文化発展の研究をこの研究所の学術方針のひとつとした。その後二十年来費孝通の指導の下で、この研究所は中国西部開発や多民族関係と少数民族社会と文化発展に関する国の重要な科学研究プロジェクトを次々に請け負ってきた<sup>13)</sup>。

費孝通は、みずからの学問をフィールドワークの基礎の上に打ち立ててきた人類学者として、高齢にもかかわらず、可能な限り少数民族の基層社会を歩き回った。彼の調査方法のひとつは、かつて訪れたところを繰り返し歩くことである。たとえば80年代に彼は四回大揺山に登っている。ドクターストップでラサを訪れることができなかつたほかは、ほとんど全部の少数民族地区を歩きつくした。どこへ行っても彼はその土地の少数民族の声に熱心に耳を傾けた。そしていつもその土地の民衆の立場から考え、問題の分析を行なった。「辺区開発四題」<sup>14)</sup>の“赤峰篇”(1984)では、彼は内モンゴル赤峰地区の農牧民族関係の歴史と現実を分析した。そこには、少数民族、特に遊牧民の祖国に対する大きな貢献や、生態環境、産業形態などで紛糾しているモンゴル族と漢民族との関係なども書かれている。“包頭篇”(1985)では西部地区の国有大中企業が“企業が社会を運営する”場合の人文と生態のバランスの失調をいかに克服したか、いかに技術の力を拡散し民族地区を発展させるかなどの問題について述べているし、“甘南篇”(1985)では隴西民族回廊の多民族関係問題やチベット族の現代化の問題などを提出している。彼は何度も甘肅省臨夏回族自治区を訪れ、回族の商経能力を発揮させて西部の経済を活性化させることを繰り返し強調している<sup>15)</sup>。1997年から2001年にかけて、費孝通は繰り返し国内の(人口十万人以下の)“小民族”の調査と研究を繰り返すべきだと提案した。この提案は国家民族委員会の支持を得、2000年から2002年に北京大学、国家民族委員会民族問題研究センター、中央民族大学などの研究員を主にして、全国でこの新しい研究計画を実施した<sup>16)</sup>。この結果はまもなく重要な学術成果として世に出るだろう。全体に費孝通の民族研究は独自の民族理論を打ち立てたほか、晩年には西部開発に関係のある少数民族の文化適応、少数民族の経済、多民族関係及び“小民族”問題など、学問を応用しようとする強い意識がみられた。

13) この研究所の関係研究の主なものとして次のものが挙げられる。潘乃谷、馬戎主編 1993年『辺区開発論著』北京大学出版社。潘乃谷、周星主編 1995年『多民族地区：資源、貧困与発展』天津人民出版社。高丙中主編 1997年『現代化与民族生活方式の変遷』天津人民出版社。色音著 1988年『蒙古遊牧社会的変遷』内蒙古人民出版社。潘乃谷、馬戎主編 2000年『中国西部辺区発展模式研究』民族出版社。王俊敏著 2001年『青城民族——一個辺疆城市民族関係の歴史演変』天津人民出版社。趙嘉文、馬戎主編 2001年『民族發展与社会変遷』民族出版社。

14) 費孝通著 1987年『辺区開發四題』浙江人民出版社。

15) 費孝通著 1988年『費孝通學術精華録』北京師範學院出版社 pp. 524。

16) 費孝通 1998年『反思・對話・文化自覚』馬戎、周星主編『田野工作与文化自覚』群言出版社。麻国慶 2003年『全球化与文明對話中的周边的辺縁民族：狩獵採集民的‘自立’与‘苦惱’』中国社会科学研究會編『全球化下的中国与日本——海內外学者的多元思考』社会科学文献出版社。

## “多元一体”の民族理論

1988年11月、費孝通は香港中文大学の招きに応じて“中華民族の多元一体構造”という有名な講演を行なった<sup>17)</sup>。彼はこの講演で“中華民族”の生存空間、多元起源、複雑な歴史形成過程、“多元”と“一体”の構造関係などについて全面的に論述し、学界で“多元一体”と言われる民族理論を正式に提出した。費孝通本人はずっと「江村経済——中国農民の生活」のような、影響のある少数民族社会の調査研究の著作がないことを非常に残念がっていたが、この“多元一体”理論は同様に彼に大きな栄誉を与えた。費孝通は長年民族研究に携わってきた実践と収穫に基づき、熟慮し慎重にこの民族理論を提出した。本人の説明によると民族研究における長年の戸惑い、すなわち漢民族と少数民族が社会歴史の発展にどのような作用を及ぼしたか、また、漢民族と国内のすべての少数民族を含む“中華民族”をどのように見るべきかという問題からとうとう抜け出す糸口をつかんだのだ<sup>18)</sup>。

費孝通のすばらしい講演の全文を繰り返し読み、筆者はこの理論の要点を大体次のように帰納することができると思う。

1. 費孝通の“中華民族”の定義は、中国領域内の56民族の“民族実体”である。これは人為的な“虚構”の民族でもなく、簡単に各民族をまとめた総称でもない。これは確実に存在する56の民族からなる互いに依存し統一した分けられない中華民族の“総体”であり、総体的なアイデンティティを持つものである。したがって彼は後に56の民族が基層であり、中華民族が上層であり、民族のアイデンティティは異なる層を持ち、それは矛盾しないという“多層論”を特に引き出した。

2. 中華民族の基本構造は“多元一体”であり、中国の複雑な多民族関係の歴史と現実はともにこの構造の中で理解すべきである。“多元”とは“一体”を構成する各部分を指す。各民族はそれぞれ起源と形成、発展の歴史や独特の文化やアイデンティティを持ち、“一体”は“多元”の基礎の上に現れた総体である。これは中国領域内の各民族が歴史上発展してきた相互関連と相互依存関係を指し、共通する文化と全体の利益及び更に上層のアイデンティティを持つ。“多元”と“一体”に対してそれぞれを分離して理解するのはよろしくない。これは中国多民族社会の基本構造とみなすべきであり、同時に中国多民族史の基本過程であるとするべきである。

3. “多元一体”構造は中国の歴史が長期にわたって発展してきた結果である。分散し

17) 費孝通 1989年第四期「中華民族的多元一体格局」『北京大学学報』。

18) 費孝通 1998年「簡述我的民族研究經歷与思考」『国立民族学博物館調査報告8』日本国立民族学博物館。周星 2004年10月「中国民族学における文化研究は現在直面している基本問題」『激動する世界と中国——現代中国学の構築に向けて——』愛知大学 ICCS 国際シンポジウム論文集。

た“多元”が次第に合成して“一体”になる歴史の過程である。この過程で漢民族が凝集のコアとして作用しているが、やはり“多元”の基層となる一元に過ぎない。各少数民族もそれぞれ“多元”の中の一員として、この次第に凝集してひとつの全体を形成する過程に参与している。この歴史の過程で形成された“一体”は漢民族ではなく、その上層に位置する一体であり、かつ多元である複合体である。この複合体は“違いを持つ一致”であり、内部矛盾を含み、外的条件の変化に適応しつつ生存し、発展している。費孝通はこのような認識があってこそ始めて“中華民族”や“漢民族”、“少数民族”が各々の位置を占めることができ、互いの関係も系統的に明らかにできると考えている。彼はもし多元一体構造を持つ中華民族の形成過程を明らかにすることができれば、それはとりもなおさず民族と民族の関係という角度からの中国通史となると述べている。

4. 費孝通の講演は中華民族の“多元一体構造”のダイナミックな形成過程でしばしば発生するさまざまな具体的な形態についての深い思索をわかりやすく述べている。その中には地区的な多元の統一、凝集のコアと多民族の大融合、若干の民族大回廊における民族の移動、多民族共有の文化、少数民族の漢化と漢民族の少数民族化、普遍的な交錯と分布、複雑な各種族間の現象と民族の境界の曖昧性などが含まれている。費孝通の講演は、中国多民族関係の真実の歴史と現実の状況に基づいて上手に飽きさせることなく語り、明快でわかりやすく、説得力もある。

費孝通の“多元一体”の民族理論をさらに正確に理解するために、以下の点に特に注意が必要だと思う。

まず、この理論は費孝通本人が長年民族研究に携わり、中国民族問題について深い思索をめぐらした自然の結果であること。近現代以来中国の多くの学者が程度の差こそあれ、この問題にかかわってきたが、費孝通がこの影響力のある理論を提出したのは偶然ではない。費孝通は、国内の少数民族の社会歴史文化に造詣が深いばかりでなく、漢民族社会も深く研究した数少ない学者の一人である<sup>19)</sup>。実際、費孝通は少数民族だけを民族学の研究対象とすることに反対し続けていた。彼自身漢民族と少数民族社会に対してそれぞれ“ミクロ的”で深いフィールドワークによる実証的研究を進めると同時に、人類学全体からの意義も深く心においていた。職業的な学術訓練によって複雑な中国多民族社会の歴史と現実の問題に面した時すばらしい洞察力が発揮された。費孝通は基層コミュニティに対する細かい研究に長じており、社会構造と社会体系およびその変動のメカニズムに対する分析も重視したため、独特の概括力を具えたこの国に根ざした概念を導き出すことができたのである。

次に、費孝通の民族理論はある程度と意義において、中国民族学者の集団的知識であり

19) 周星 1990年第四期「關於“中華民族多元一体格局”的學術評論」『北京大學學報』。



認識であると言える。たとえば、費孝通に大きな影響を与えた呉文藻は、つとに中国の特色のある民族学の発展についての問題を提出していた。彼はイギリスの機能主義の方法で中国の各種の社会形態を研究すべきだとし、少数民族の辺境のコミュニティから漢民族の農村を経て東部の都会に至るべきだとした<sup>20)</sup>。費孝通はまさにこれを実践してきたというべきであろう。また、潘光旦は、孤立して民族別の歴史を研究することはできないと考えている。「このような歴史研究は漢民族ないしすべての中華人民の大共同体がどのように形成したのか、という大きな問題と密接に結合して行なうべきで、その第一歩は少なくとも絶えず互いに参照しあって進めるべきである。そうしてこそ初めて手がかりをつかむ望みが出てくる。個別にやるのは絶対にだめだ。祖国の数千年にわたる長い歴史の中で、このような民族間の接触、交流と融合の過程は決して途絶えることなく行なわれ、発展しており、我々は現在その過程の中にいる。人文科学の面から見て、この過程こそが祖国の歴史であると言って差し支えない<sup>21)</sup>」。費孝通はこの部分を引用し、さらに次のように説明を加えている。「我々は漢民族の形成についていまだに学問的な説明ができないでいるが、この民族が現在世界で最も人口の多い民族になったのは、決して漢民族の祖先の自然な繁殖の結果ではなく、中国の歴史が発展する中でもともと漢民族ではなかった人々を吸収してこのように大きくなったのである。他の民族で実際にもともと異なるアイデンティティをもった人々が次第に融合して形成されたものも多い。融合があるのに対して分化もある。絶えず分かれたり合したりしながらわが国の現在の民族構造が現れたのである<sup>22)</sup>」。ここから潘光旦と費孝通の民族思想は多くの類似点があることがわかる。このほか直接、或いは間接に費孝通がこの民族理論を考え出すのに貢献しているものに、民族歴史学者賈敬顔の“漢人”の研究<sup>23)</sup>、陳連開の中華民族の起源についての研究<sup>24)</sup>、谷苞の遊牧民族の歴史の研究<sup>25)</sup>などがある。特に陳連開は中華民族の形成史だけでなく、中華民族の学術研究史などでも実りの多い成果を世に問うている。さらに範囲を拡大するなら、中国考古学の中国新石器時代の文化の多元性といわゆる“区系類型”の研究、歴史学会の中華民族形成の問題についての深い討論などがある。すなわち費孝通の“多元一体”の民族理論は実際には多くの学者の知恵を汲み取っているのである。それゆえに中国の現代の民族学、歴史学、考古学などの領域から強い支持を受けているのである。

20) 顧定国著、胡鴻保、周燕訳 2000年『中国人類学逸史』社会科学文献出版社 pp. 97.

21) 潘光旦 1955年「湘西北的“土家”与古代巴人」『中国民族問題研究集刊』第四輯中央民族学院研究部.

22) 費孝通 1988年「潘光旦先生關於畲族歷史問題的設想」『費孝通民族研究文集』民族出版社.

23) 賈敬顔 1985年第六期「“漢人”考」『中国社会科学』. 賈敬顔 1989年「歷史上少数民族中的“漢人成分”」費孝通主編『中華民族多元一体格局』中央民族学院出版社.

24) 陳連開 1989年「中華文化的期限輪中華民族的形成」『中国古代文化史』第一冊 北京大学出版社. 陳連開著 1994年「中華民族研究初探」知識出版社.

25) 谷苞 1986年「匈奴遊牧社会的歴史地位」『民俗学研究』第八輯 民族出版社.

第三に、この理論はしっかりした方法論の基礎を持っているということである。費孝通は繰り返し民族研究の方法論はマクロの研究とミクロの研究を結合し、中華民族という総体に対する研究も各民族に対するミクロ的な研究もあると提示している。費孝通はこの二種類の研究方法は矛盾せずに結合することができると考えている。彼の初期の広西省大瑤山の研究は非常にミクロ的である<sup>26)</sup>が、理論とマクロ的視野においては中華民族研究と一致している。実際にはヤオ族内部にも全体の共同意識とそれぞれの支系に言語及び生活方式の異なる特徴があり、これは中華民族が多くの異なる民族を包括しているのと同じである。費孝通は、これは個別的な現象ではなく、各民族内部にもしばしば“多元一体”の現象が存在することを予測させるものだと指摘している<sup>27)</sup>。大瑤山の民族の複雑性から彼は全国の多民族構造の動きの一端を見、それを推し進めて漢民族と各少数民族を包括する中華民族の形成と発展の問題を提出したのである。彼は中華民族の分離と結合の歴史は実際には各民族のミクロ的具体的な実態から観察できる、すなわち各民族間の分離と結合の関係は中華民族のような多民族複合体の形成の過程に対する理解を豊かにし、民族問題の理論的認識を充実させると考えている。これがすなわち費孝通が提出した“中華民族形成の総体的観点”<sup>28)</sup>である。台湾の人類学者喬健が指摘しているように、費孝通の学術研究はこれまで機能学派だといわれてきたが、彼の民族理論ははっきりと歴史的観点、総体的観点、構造的観点を体現している。費孝通がこのようにできたのは決して彼一人の力によるものではない。中国のように長い歴史を持ち、広大で複雑な文化の中で社会科学の研究をするには、単純にある一学派に限って採用するのは実際には困難であり、必然的に多くのことを包括し、不断に発展する新しい観点や方法を吸収しなければならないのだ<sup>29)</sup>。

方法論においては多民族中国の広い地域に対し、悠久の歴史と多民族関係の複雑さに対し、考古学、歴史学、言語学、社会学などの調査と結びつけることにより研究を深めるべきであると費孝通は特に強調している<sup>30)</sup>。専攻からは特に社会科学或いは人類学は歴史学と結びつかなければならない。費孝通本人もそのようにしている。あまり詳しくない歴史学、考古学、言語学に関する問題にぶつかるたびに彼はいつも謙虚にその道の専門家に教えを請うた。

第四、“多元一体”の民族理論は、中国的特色を備えた社会人文学科に対する中国の学者の数少ない貢献のひとつだと言うことができる。費孝通は西洋の現代民族の特徴を中国

26) 費孝通 1988年「瑤山調査五十年」『費孝通民族研究文集』民族出版社。

27) 費孝通 1988年「潘光旦先生關於畲族歷史問題的設想」『費孝通民族研究文集』民族出版社。

28) 費孝通 1991年「中華民族研究的新探索」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

29) 喬健 1991年「論費孝通社会研究的方法」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

30) 費孝通 1982年「支持六江流域民族的綜合調查（六江流域民族的綜合調查を支持する）」『民族学報』総第二期。

の民族に当てはめることにはっきりと反対していた。彼はそうすれば問題が出てくると考えていた<sup>31)</sup>。彼は西洋の民族理論は“同一地域の居住”を民族の指標とし民族国家を作っている。そして政治観念の中では国と領土を切り離して考えられない。このような概念から、民族を国家と結びつけ、領土を完全にすることを求めるようになる。これはとりもなおさず、世界の民族闘争が絶えることがなく、民族戦争が今なお収まらない原因でもある。費孝通によれば、西洋の民族理論と民族関係に対応させるためには、中国では“民族集居地”という概念に置き換えればよいという。この民族の定義の中で、“同一地域の居住”を特徴としてカウントする認識には深く味わう価値がある<sup>32)</sup>。

費孝通の理論における“民族”とは何だろうか。この一見簡単な問題も各国の具体的な状況から分析を加える必要がある。中国には発達の段階の異なる民族がおり、中華民族という総体もある。この総体は、多くの、互いに離れることのできない民族から成り立っている。総体を形成している各部分の関係は密接で、分けることができないが、均一的なものでもない。費孝通は、“民族”を時代と土地によって変化するものであるが、それは何かの必要のために、空虚な概念から出されたものではなく、客観的な実態であると見ている。費孝通は民族の認識は、現況の調査と歴史研究を結合し、実際の国情に深く基づくべきだと主張している。彼自身の言葉を借りるなら、中国こそ民族理論を学ぶ最良の教室なのである。

## 反響、評価と問題点

費孝通の“多元一体”民族理論が提出されるや否や、国内外の学界から広く注目を集め、好評が波のように押し寄せた<sup>33)</sup>。それはまさに“洛陽の紙価を高からしむ”という有様だった。1990年5月、中国国家民族委員会は特別に国際シンポジウムを開き、この理論に対して評議と討論を行った<sup>34)</sup>。シンポジウムに出席した学者たちは、費孝通の講演が新しい体系を提出したと、基本的に一致して認めた。ほとんどの学者は、これがまったく新

31) 費孝通 1988年「在國家民委召開的民族問題五種叢書工作會議上的講話」『費孝通民族研究文集』民族出版社。

32) 費孝通 1998年「簡述我的民族研究經歷与思考」『国立民族学博物館調査報告8』日本国立民族学博物館。

33) 馬戎 1989年第四期「重建中華民族多元一体格局的歷史条件」『北京大學學報』。陳連開 1990年第二期「民族研究新發展的良好開端」『西北民族研究』。周星 1990年第四期「關於“中華民族多元一体格局”的學術評論」『北京大學學報』。

34) このシンポジウムについては次を参照。周星 1990年6月20日「一九九〇年國際民族研究學術討論會綜述」『光明日報』。陳連開 1990年第二期「民族研究新發展的良好開端」、『西北民族研究』。周星 1990年第三期「民族研究國際學術討論會述評」『民族研究動態』。参加論文を後日まとめた1990年『中華民族新探索』中国社会科学出版社。

しい民族理論であると承認した。林耀華はおのれの長年にわたる研究経験に基づき、費孝通の理論に非常に賛同し、費孝通の貢献は“多元一体”という核心的概念を提出し、それを論証したことであり、我々が中国の民族と文化の概括的特徴を認識するために有益な道具と全体を理解する鍵を与えてくれたことだと指摘した<sup>35)</sup>。このシンポジウムで、費孝通の理論は中華民族の構造及び中国の多民族の歴史に対してマクロ的で学問的な概括を行ない、二十世紀の中国民族学及び民族関係史の領域で広い影響力と深い意義のある学説だと認められた。現在その影響はすでに民族研究の範囲を超えて、中国の歴史学、考古学、民俗学、文化研究などの領域に広まり、程度の差こそあれ、中国の民族政策などにも影響を及ぼし、社会の各界でも広く知られ、認められている。

費孝通の見解は、同時に香港、台湾及び国外の学界にも反響を与え重視された。彼の講演は相次いで英語と日本語に翻訳され、海外でも多くの討論が引き起こされた。1994年、10月28日、喬健は香港中文大学人類学講座の教授への就任講演で<sup>36)</sup>、中華民族の多元一体構造は、人類学者だけが全面的で客観的、かつ系統的な説明を加えることができると指摘した。この説明は次の三つの段階からなる。まず、中華文化が多元性と共通性及び個性を持つという特徴に対する説明。次に錯綜し複雑な民族間における経済活動、政治及び文化の関係に対する説明。最後に共存共栄の大集団が形成された基本的原因を分析し、世界に向けて中国の経験を提供すること。喬健はこのような説明と分析は、高度な学術的価値があると同時に、実用価値もあり、中華民族多元一体の構造を知ることは、中学での公民教育、大学での一般教養教育の中で重要な部分を占めるべきだと確信している。李亦園は論文で、費孝通の講演は、中華民族が歴史の中で“それぞれ個性を持つ多元の統一体”をどのように形成してきたかを徹底して明らかにしており、そこから、漢民族中心主義の歴史観を超越したと指摘している<sup>37)</sup>。1996年10月、日本の国立民族学博物館が、中日両国の民族学者と歴史学者を招き、中華民族“多元一体”理論に関するさまざまな学術問題を考えるためのシンポジウムを開催した。日本の塚田誠之は、費孝通はまぎれもなく啓示的でマクロ的な民族理論を打ち出したと考えている。また、ここで特に触れておきたいのは、今なお国外の多くの大学院や研究機関で中国の民族と文化について討論する際、この費孝通の講演が最も基本的な必読書或いは参考書として、最前列に挙げられていることである。

我々は、1990年の国際シンポジウムに提出された論文の分析から、費孝通の理論の影

35) 林耀華 1991年「認識中華民族結構全局の钥匙」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

36) 喬健 1995年第一期「中国人類学發展的困境与前景」『广西民族学院学报』。

37) 李亦園 1998年「婚姻形態与婦女地位——中国境内各民族之比較研究」馬戎、周星主編『田野工作与文化自覚』群言出版社。

響を受け、中国民族学の研究に新しい動向が出現したことをはっきり見て取ることができる。まず多くの学者が、多民族の中国の歴史から“多元一体構造”が形成された過程について、より多くのより具体的な細部を発掘しようとした。例えば、佟柱臣は考古学の立場から中華民族の融合と統一の問題を分析し、谷苞、王鐘翰、白翠琴らは漢民族が少数民族に融合したり、少数民族が大量に漢民族化した状況について歴史的に深く遡り、宋蜀華、史金波はそれぞれ歴史上の“百越”や“西夏”と“多元一体構造”の関係について重要な論述をした。さらに多くの学者は、その他の少数民族の歴史資料から中華民族の多元一体構造について探求したり、さらに具体的に詳しく、中国の一部の少数民族の形成過程に、程度の差こそあれ存在する“多元一体”の現象を明らかにしようとした。例えば、王輔仁、李紹明、劉堯漢、胡起望、謝肇華などが、それぞれチベット族、イ族、ヤオ族、満州族の形成過程とその文化的特徴について研究したのは、その例である。これに対して、費孝通は後に、多元が一体を形成するのは、民族共同体形成の普遍的な過程であるように考えた。第三に、索文清や周星などの区域多民族関係史の研究もいくつか現れた。最後に、日本の社会人類学者中根千枝<sup>38)</sup>、イギリスの人類学者王富文(N. C. Taap)<sup>39)</sup>にも触れねばなるまい。彼らはそれぞれチベット族と漢民族の関係、或いはミャオ族の民族性などについて述べ、チベット人の漢化、漢民族のチベット化やミャオ族内部の複雑性などの現象から、さまざまな側面において費孝通の中国の民族の歴史に対するいくつかの観点に呼応する見解を示している。1990年の国際シンポジウムによって、中華民族多元一体構造についての深い研究が引き起こされ、その成果の一部は、9年後に出版された「中華民族多元一体構造」の修訂版に吸収された<sup>40)</sup>。

1990年の国際シンポジウムで提出されたいくつかの問題から、費孝通は民族のアイデンティティの多層性の問題について理論上さらに深めていく必要を感じた。1996年に日本の国立民族学博物館で行なわれたシンポジウムに提出した書面のレポートで、民族アイデンティティの多層性について、サムナーが『フォークウェイ』の中で示している“ウイ・グループ”の概念と、シロゴロフのエトノス論を結びつけ、自己の理論に説明を加えた。これは最初に行なった講演に対する重要な補足であり、発展であると見られている。

十数年来中国国内で行なわれている民族と文化の問題にかかわるさまざまな学術会議において、費孝通の民族理論は頻繁に言及されたり引用されたりした。そして絶えることなく検討され、応用され、より完全になっていった。北京大学社会学人類学研究所は、費孝

38) 中根千枝 1991年「從人類学觀點看藏漢關係」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

39) 王富文 1991年「苗族与民族性」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

40) 費孝通主編 1999年『中華民族多元一体格局(修訂本)』中央民族大学出版社。

通の指導の下で“中華民族の凝集力の形勢と発展”に関する国家プロジェクトを展開し、その成果はこの理論をさらに深め、細化するのに一定の貢献をした<sup>41)</sup>。費孝通の民族理論を指導とし、少数民族、漢民族及び中華民族の多元一体構造についての討論はより増加し、深まる傾向が見られる。区域的な多民族構造及びその形成過程の研究、民族関係と民族政策に関する研究など、派生、発展、応用する動きも見られる<sup>42)</sup>。例えば滕星は“多元一体”理論は中国少数民族のバイリンガル教育と、バイリンガル教育研究を理論の上で方向付けるものであり、少数民族のバイリンガル教育は中華民族の“多元一体構造”という具体的な国情から決定されるものだとしている。多民族国家がどのような国民教育を実施すべきかという問題に言及したとき、滕星は費孝通の民族理論の啓示のもとに“多元一体化教育理論”の構想を提出した。この構想は多民族国家の教育は同時に各民族の優秀な伝統文化を伝える機能を持つべきであり、“多元一体化教育”の対象はマイノリティーだけでなくマジョリティーも含む。またこの教育の目的は、各民族の優秀な文化遺産を継承するだけでなく、各民族間の文化交流を盛んにさせることにより、各民族が経済的にともに発展でき、文化をともに繁栄させ、政治上互いに尊重するようにすることだとしている<sup>43)</sup>。このところ“多元一体”理論を民族研究以外にさらに広げることのほか、他の文化研究、さらには人類社会の発展に関する問題の解釈に用いる傾向もある<sup>44)</sup>。

“多元一体”の説明について、絶対多数の中国の学者が賞賛している。多くの学者は“多元”と“一体”は、ともに中国の社会に長期にわたって客観的に存在しており、中国の現実の民族関係の最も基本的な構造である。したがって中国国内の民族問題を理解したり処理したりする場合、“多元”と“一体”の均衡をうまく把握して、極端にならないようにしなければならない。例えば、“一体”と言った場合、それは民族の同化や強制的な一体化ではなく、各民族の“多元”に内包されている分割することのできない総体に過ぎないのである。“多元一体”の理論は、民族平等と多元の尊重という前提のもとで、総体の安定を守ることの重要性を強調している<sup>45)</sup>。しかし喬健の言うように、これは簡単なことではない。なぜなら、多くの国で、中国の漢民族のように、多民族の中に優勢或いは主

41) 馬戎、周星主編 1999年『中華民族凝集力形成与発展』北京大学出版社。馬戎、周星主編 2001年『中国民族社区發展研究』北京大学出版社。

42) 覃彩鑾 1995年第二期「壯族传统文化多元一体格局及其成因」『广西民族研究』。李建新 1966年第一期「新疆維漢關係的調查研究」『西北民族研究』。宋蜀華、陳克進主編 2001年『中国民族概論』中央民族大学出版社。秦永章著 2005年『甘寧青地区多民族格局形成史研究』民族出版社。

43) 滕星 1996年第二期「中国少数民族双語教育研究的对象、特点、内容和方法」『民族教育研究』。伍隆莹、董艷 1997年第一期「在京中青年学者談民族教育」『民族教育研究』。

44) 方李莉 1998年「費孝通“多元一体”理論与人類文化發展的趨勢」馬戎、周星主編『田野工作与文化自覚』群言出版社。

45) 喬健 2001年「民族多元与文化多元」馬戎、周星主編『二十一世紀：文化自覚与跨文化對話（一）』北京大学出版社。

導権を握る民族があり、彼らは共同の総体の動きや政策の決定をコントロールしたり影響を与えたりしやすいからだ。

費孝通は過去の漢民族を中心とした観点で書かれた歴史に一種の反感を持ち続けてきた<sup>46)</sup>。彼は少数民族が建てた王朝や地方政権にだけ注意する民族史の研究には問題があると考えていた。そのため彼は漢民族と少数民族が共同で作り上げた中国の歴史を全面的に描こうとした。彼の理論は間違いなくこれまでの中国の歴史観を新しく立て直すのに非常に大きな影響力があった。費孝通が提示したこの巨視的な理論は、さらに細部の研究の積み重ねにより補充と検証をしていく必要があるだろう。例えば全国の範囲では、漢民族が多元一体構造の凝集のコアと言えるだろうが、さまざまな規模の異なる多民族地区では、その多民族の関係の具体的な状況は千差万別である。すなわち局部的には、漢民族ではなくある少数民族が凝集のコアとなっている可能性が確実に存在すること、同様に、全国的には漢民族と少数民族を対比する図式が成立するかもしれないが、地区や時代によっては、少数民族同士の複雑な関係の方が重要である歴史的事実や現状がしばしば存在することなどがあるからだ。

討論の中で、比較的意見が分かれるのが、“中華民族”という概念をどのように理解するかということである<sup>47)</sup>。“中華民族”とはひとつの“民族”であろうか。56の民族と同じとすることができるであろうか。これは政治用語かそれとも民族学の学術概念か。これは“現在完了形”(すでに完成したもの)なのか、それとも“現在進行形”(まだ形成途中)なのか。中国と隣国にまたがる民族の場合、どのように“中華民族”を理解したらよいのか。ある学者たちは費孝通の民族理論の核心は、中華民族は政治的に“一体”であり、文化的には“多元”であるということだ、という考え方に傾いている。日本の毛利和子は「費孝通は、長い歴史の中で形成されてきた文化的アイデンティティと政治的アイデンティティを区別して把握していない」と述べ、「文化的アイデンティティは自然に形成されるものであるが、政治的アイデンティティは国との関係によって発生するもので、人為的なものである」と指摘している<sup>48)</sup>。陳連開はこの種の問題について次のように説明している。「国によって歴史のプロセスは異なる。単一の民族によって国が形成されることもあるが、中国は数千年の間統一多民族国家である。“中華民族”は中国各民族の総体的アイデンティティであり、客観的に存在している。その総体の利益と各民族の利益に一致

46) 費孝通 1998年「簡述我的民族研究經歷与思考」『国立民族学博物館調査報告8』日本国立民族学博物館。

47) 陳連開 1991年5月「怎樣理解中華民族及其多元一体(討論綜述)」費孝通主編『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社。

48) 毛利和子 2004年「総括」横山広子編『国立民族学博物館調査報告50 少数民族的文化和社会的動態——来自東亞的視点』国立民族学博物館 pp. 280-281。

が認められ、また民族のアイデンティティにも反映されている。しかし中華民族は単一、単純で、内部の同質性の高い民族ではない。これと56の民族は属する層が異なり、56の民族間の多元一体的関係が中華民族を構成しているのである<sup>49)</sup>。民族のアイデンティティについて考えると、具体的なコンテキストによって変化する多重な複雑性により、中華民族というアイデンティティも可能であろうと思う。筆者の理解によれば、いわゆる中華民族の文化とは、漢民族の文化と各少数民族の文化及び多民族の密接な関連と相互作用、相互浸透によって形成された、民族を越えて享受されるものである<sup>50)</sup>。

さらに深刻な問題であるかもしれないが、欧米の文脈による“民族”(nation)という概念は中国の多民族の歴史と現実を説明できるのだろうかという問題がある。たとえ中国の古代の文献に“民族”という語の用法を若干見出すことができるとしても、近現代の政治、或いは学術用語の“民族”という概念は、19世紀から20世紀にかけて、中国語の中で広く使われるようになったものである<sup>51)</sup>。世界の近現代史上このようなカテゴリーが生み出されたのは、西欧資本主義という背景の下で、“民族国家”が次々に誕生したことと密接な関係がある。これをヨーロッパ以外の人民構成をもち民族関係の複雑な国や地域に当てはめると、当然異なる理解が生じ、混乱や紛らわしさが生じる。中国語の“民族”のカテゴリーの“多義性”<sup>52)</sup>はまさにこの混乱の反映である。ヨーロッパの歴史と文化的背景から、中国の民族と民族関係及び“中華民族”というような概念を見ると、理解しにくい点が多々あるだろう。さらにこの“中華民族”は最近になって登場したもので、列強の侮辱に抵抗した近現代史や、新生国家であることと密接な関係を持つ概念である。それは非常に政治的だとはいえ、歴史や文化的根拠をまったく持たないわけでもない。これに対して、費孝通は次のような意見を持っている。名称と概念のもつ意味は時代の発展、事物の変化や学問の進化により発展するものであり、重要なのは、中国多民族社会の現実をどのように捉え、概念の絶えざる更新の中で問題を考えるべきだということだ。つまり、費孝通の定義した“中華民族”とは、一体性を持ちながら、豊富な差異性を持つ“民族”概念である。しかし馬戎は「この理論は基本的に中国の民族の状況を説明するためにしか使

49) 陳連開 1990年第二期「民族研究新發展的良好開端」『西北民族研究』。

50) 周星 2001年「漢族とその経済生活」佐々木信彰編『現代中国的民族と経済』世界思想社。

51) 中国学界はこの問題について検討が続けられている。一般には中国語の“民族”は西洋語のnationを日本語訳した“民族”という語が中国に入ったと見られている。しかし郝時遠の最近の研究によると、多くはないが、中国の古代文献に“民族”を名詞形式にして宗族の所属や華夷の区別をした例がある。ここから“民族”という語は中国の古代漢文に固有の名詞だということが証明できる。郝時遠の「中文“民族”一詞源流考辨」, 電子文献, 2005年を参考にされたい。

52) 周星著 1992年『民族学新論』陝西人民出版社 pp. 1-15. 最近“エスニックグループ”と“民族”のカテゴリーについて新しい討論がされている。範可 2003年第四期「中西文語境的“族群”与“民族”」『广西民族学院学报』を参照されたい。



えない」と言っている<sup>53)</sup>。

## まとめ

費孝通の理論が特に重要であり、人々の注目を集めたのは、これが中国民族研究の独特な学術成果であっただけではなく、むしろこれが中国の直面している国と民族の関係という問題を何度も説明しようとしたからである。中国はまさに現代化を推し進めており、中国多民族の歴史と現実を、合理的かつ適切に説明できる民族理論を構築する必要があった。費孝通はこれに貢献したのである。費孝通の理論が将来中国の民族政策や民族問題にどのような影響を与えようとも、彼本人が構築した主なものはやはり多民族の中国の歴史についての理論、或いは中国の民族構成の多重アイデンティティについての人類学の理論である。費孝通はどんな意識形態にも傾いておらず、彼の理論は固まった意識形態の原則から出発したものであったことは決してない。逆に、常に中国社会の歴史や文化の具体的な現実に立脚したもので、これが費孝通の理論に生命力のあるゆえんではないかと思う。しかし中国の現行の民族政策の意識形態の背景がマルクスレーニン主義の民族理論であることから考えると、彼が提示した新しい民族理論も多少は“脱”意識形態の傾向があると言えるだろう。

費孝通は偉大な愛国者であった。しかし彼は決して“民族”意識の強い人ではなかった。実際には彼は晩年“多元一体”“求同存異”“美美与享”という考え方で全人類の多元文化を説明しようとする傾向に傾いていった。費孝通は“中華民族”の“多元一体”の理論がもう完成したとは思っておらず、逆にそれが開放的であることを望み、さらに研究を深めていく必要があると考えていたのである。

訳／高木立子（北京科学技術大学日本語講師）

53) 馬戎 2001年「試論中国的民族社会学研究」趙嘉文、馬戎主編『民族發展与社会変遷』民族出版社。